

T. S. Eliot 研究

一人間性の回復への試み一

その 2

宮 野 祥 子

I

この小論は先に公にした拙論〈T. S. Eliot 研究一人間性の回復への試み一その I〉(梅光女学院大学英語英文学会「英文学研究」第 3 号)に続くものである。前論においては〈empty, vacant, etc.〉ということばの意味内容の定着とその変容とを明らかにすることにより、詩人の道程の起伏の一側面を知る手がかりを考察したのであった。この小論ではさらに〈twilight, the violet hour, the dark, darkness〉ということばの意味内容の定着とその変容を考察することにより、前論と同様に詩人の道程を理解する手がかりとしようとするものである。この内、特に〈darkness〉に関しては二宮尊道著「神の闇」⁽¹⁾によって示唆を与えられた。

まず〈the violet hour, twilight〉ということばを作品の中に追うと、初期の作品のなかにこれらのことばと同様の意味内容をもつことばが用いられている。しかしあまり重要な内容が与えられているとは考えられない。それは〈The Waste Land, The Hollow Men〉を中心として特徴的に用いられているようである。そして、その後、〈Four Quartets〉にいたるまでその意味内容は終始一貫して等しく用いられているようである。

次に〈the dark, darkness〉ということばを作品の中に追ってみると、初期の作品の中にはわずかに見出される。その後、〈The Waste Land〉には〈dark〉ということばは用いられておらず、〈night〉ということばのみ見出される。さらに〈The Hollow Men〉には〈dark〉も〈night〉も用いられていない。〈The Hollow Men〉以後の作品においては〈East Coker〉の〈darkness〉を頂点として、〈dark〉ということばが多く用いられている。しかしながら初期の作品中の〈the dark〉、〈Ash-Wednesday, The Choruses from 'The Rock'〉を中心とする〈dark〉及び、〈Four Quartets〉の〈darkness〉はそれぞれ、

<twilight>とは異って、それは弁証法的に対立する価値を止揚する絶対的な世界の表徴である。従ってこれらを総括的に考えてみると、<The Waste Land>から<Four Quartets>への展開は、Eliotが徐々にその両面価値性を超克して、一つの絶対意識即ち<神の闇>へと進む道であったと云えよう。以下それぞれのことばについて意味内容の変化とその定着とを考察してみたい。またこれらのことばの意味内容をN. Berdyaev (1874—1948)のそれと比較してみたいと思う。N. Berdyaevはその思考傾向が非常にEliotに似かよっていると思われる。Berdyaevの云う両義性を手がかりに、両者の思想の比較研究をすることによって、Eliotの描出している世界をさらに明確に知ることができるのではなからうかと思う。

II

この章においては<the violet hour, the violet air, twilight>ということばを取りあげて考察してみたい。<the violet hour>は<The Waste Land> (1922)の<The Fire Sermon>に見出される状況である。これは、<evening>つまり、夕暮、たそがれ時を表わしていると同時に、<すみれ色の時>というと、一見ロマンティックではあるが、その裏に、自己の現状即ち現存在のレベルに止まろうとする人間の魂のたそがれをも意味していることばのようである。

At the violet hour, when the eyes and back/
Turn upward from the desk,
when the human engine waits/
Like a taxi throbbing waiting,

At the violet hour, the evening hour that strives/
Homeward, and brings
the sailor home from sea/
The typist home at teatime, clears her
breakfast, lights/
Her stove, and lays out food in tins.

それはタイピストが自己の現状をレベル・アップしようとする意欲を喪失して、彼女の愛人との恋愛遊戯に甘んじて、索漠とした倦怠感に身をまかせている、negative
(2)
な場面である。

さらに<What the Thunder Said>においては<the violet air>ということばによって、人間が營々として築き上げてきた文明に割れ目ができて、崩壊していく場面が描かれている。

What is the city over the mountains/ Cracks and reforms and bursts in
the violet air/ Falling towers/ Jerusalem Athens Alexandria/ Vienna
London/ Unreal

人間の力と智慧を誇る都市、人間の歴史と文明の象徴である町が、びしびしと軋み、揺れ動き、そして炸裂し、空に向かって伸びていた塔が、さかさまになって崩れ落ち、壊滅していく。今までかくも確固たる世界であると思われていたものが、すべて非実在であり、実体のない無意味な瓦礫と化していく時である。それは人間の作りあげた文明が崩壊していくだけではなく、⁽³⁾ <性の廃頽>であり、人間性が疎外されて行く時でもある。

A woman drew her long black hair out tight/ And fiddled whisper music
on those strings/ And bats with baby faces in the violet light/ Whistled,
and beat their wings/ And crawled head downward down a blackened
wall/ And upside down in air were towers/ Tolling reminiscent bells,
that kept the hours/ And voices singing out of empty cisterns and
exhausted wells.

<女はその黒髪をひっぱり廻し、ヴァイオリンの弦の上に軟弱な音楽をかき鳴らし、赤坊のような顔をしたこうもりは、たそがれの中にばたばたと翼を打って、逆さにぶらさがっている>有様には、人間の倦怠感と生の否定が暗示されている。この<ぶらさがっているこうもり>がさらに<下向きにそびえている塔、鐘の鳴っている塔>のイメージと二重にかさなり、そして<枯れた井戸の底から聞えてくる歌声>と重なるとき、ここには、いわば世界そのものが go back の姿勢に転じてしまったような、異常が正常であるような、意識が空中に浮いているような、奇妙な不安感が生じている。それは地の底から聞えてくる教会の鐘と讃美歌を暗示することにより、宗教の無力さと、人間の救いの空しさを暗示しているようでもある。この<すみれ色の明り>のなかにシルエットのように描出されているのは、<「奈落の感覚」(the sense of abyss) のすばらしい表現⁽⁴⁾>であると云われているが、同時にこれは人間性の回復に対する negative な状況でもある。

さて<The Hollow Men> (1925) の<the twilight kingdom>においても、上

述した negative な世界，人間の実存を無化してしまう世界がえがかれているようである。すでに述べた如く（一人間性の回復への試み—その I 参照）<death's twilight kingdom> <死の薄明りの王国> は未来に向って生成していく輝やかな王国ではなく，<うつろな人間>が生きている意味を見つけ出すことができず，影のようにさまよう王国である。この<The Hollow Men>という作品あたりから，Eliot の心は次第に内省的な方向に転向したもののようである。その内省への転向の有様を Eliot は，<fall>という下降性として捕えている。

Between the idea/ And the reality/ Between the motion/ And the act/
Falls the Shadow

<発想と自覚との間，動向と行動との間にあるものは心の暗いどん底を視ようとする内省への降下>ということばでこれを表現している。それは人間の内部の深淵へと降下していく意識であると同時に，人格が分裂して人間性が壊滅していく状況でもあらう。

<Ash-Wednesday> (1930) にも，Eliot が彼の内省によって発見した，はかない悪夢に等しい<薄明りの世界>の有様を描がいている。

Wavering between the profit and the loss/ In this brief transit where the
dreams cross/ The dreamcrossed twilight between birth and dying

<人間は自分が生れて死ぬまでの，露の如き夢まぼろしの世界に居りながら徒らに，利害得失の間を右往左往している>ということばがそれである。

このようにみえてくると，Eliot の形象している<薄明りの世界>は，人間精神の限界状況における，倦怠と人格の分散と，それにつらなって広がっていく空虚な時を象徴しているものと考えられる。これと同様の人間観を<キリスト教的な神秘思想>に⁽⁵⁾もとずいていると云われている N. Berdyaev の思想にも見出すことができる。彼も Eliot と同様に，人間存在の現状を，<薄明りの世界>として述べている。そして人間の魂はその持てる両義性（又は両面価値性）のために，何時までもどっちつかずの<薄明りのような夢想の世界>のなかで，<いわば二つのいつわりの無限の間で>⁽⁶⁾すりへらされている自分を⁽⁷⁾>みつめているようなものであるという。例えば，

誕生から死にいたるわれわれの「意識的」生活は薄明につつまれた夢のような

状態⁽⁸⁾

であって、

打ち砕かれた人格の断片やズタズタに引き裂かれた意識は夢魔のうちに生き、
際限なく夢を見つづける。⁽⁹⁾

という文のなかに、まさに虚無と不安とのなかで、眼には見ることのできない壁にぶつかって苦悶している人間の姿を読みとることができる。Berdyaeв のこのような人間観は、次の引用にみられる精神の発展における三段階の第二に属するものである。

第一は天上の楽園における全体性、すなわち人間が思惟や自由をいまだ体験しなかった、前意識的な時代における全体性の段階、第二は分裂と反省、価値づけと選択の自由の段階、そして第三は自由と反省と価値づけの段階ののちにおとずれる超意識的全体性、あるいは完全性の段階である。⁽¹⁰⁾

Berdyaeв が超意識というのは、人間の意識を超絶する絶対意識—ヤスパースが包みこむもの、又はひっくるめるもの (das Umfassende) として定義している絶対意識であろう。そこで Berdyaeв のいう超意識的全体性とは、I も you も he も she も it もひっくるめて持つことのできる、神のように強くなった人間存在の状態だと考えても差支えはないであろう。

III

この章では Eliot のいう <the dark, darkness> について更に考察を続けたい。<the dark, darkness> という Eliot のことばによって形象化されている世界は、<薄明りの世界> とは全く異った世界である。それは<神の闇> 即ち絶対の暗黒の世界だという考えが、徐々に Eliot の心の中に定着していく過程である。

まず<The Waste Land>以前の作品において用いられている<the dark>の特質を探ってみよう。特に顕著なものとして、<Portrait of a Lady> (1915) <Rhapsody on a Windy Night> (1915) <Gerontion> (1919) に用いられている<the dark>をあげることができよう。そしてそれらに共通な特質は、何かを包み、包み込んでいく<the dark>であると考えられる。

<Portrait of a Lady>のなかの<the dark>は

My self-possession gutters; we are really in the dark.

年上の女性に対する青年の、彼女と離別しようとする決意と、不安とが交錯して、彼の自信がぐらついてくる。それを見ている女性の不安と愛着とが共に曖昧に流れていく。口に出して気持を述べることができず、表面的な笑いを浮かべざるを得ない青年のやり切れなさを、この<暗闇>は包み込んでしまっている。つまり決意とか行動にふみ切れない人間存在の状態（限界状況）を Eliot はそのままこの<闇>のなかに包みこんで見せている。

同様に<Rhapsody on a Windy Night>に用いられている<the dark>も何かを包みこむ性格が与えられている。

And through the spaces of the dark/ Midnight shakes the memory/ As a madman shakes a dead geranium.

<memory>すなわち人間存在の限界状況をこの<闇>が呑みこんでいる。<狂人が枯れたゼラニウムの花を振りまわすように>、深夜の暗闇の中でゆさぶられて、過去が、人間の存在がそのままにゆすぶり起こされる。<闇>はこのように、人間をそのまま呑み込んでいるのであるが、同じように包み込む、呑みこむという働きが、<Gerontion>の<darkness>にも認められるのである。

Signs are taken for wonders. 'We would see a sign!'/ The word within a word, unable to speak a word,/ Swaddled with darkness.

この<darkness>が布でくるむように包み込んでいるものは<ことばの中のことば>、人間のことばでは言われないことば>である。この<Gerontion>の老人が<暗闇>に呑み込まれてしまっているものを、そのなかで手探りして求めているのは、生きる希望である。

以上のように<The Waste Land>以前の作品において認められた、<暗黒>が限界状況にある人間をあるがまゝに呑みこむという特徴は<The Hollow Men>以後<Four Quartets>以前の作品においても認められる。ただ次々に<暗黒>の世界に内包されてゆく人間の限界状況が徐々にその定着力を加えて行くことは確かだ

ある。〈薄明りの世界〉によって象徴された人間の空しい実存が、さらに明確に、厳格に形象されるのである。例えば〈Ash-Wednesday〉にはそのことが次のように形象されている。

For those who walk in darkness/ Both in the daytime and in the night
time.

Those who are torn on the horn between season and season, time and
time, between/ Hour and hour, word and word, power and power, those
who wait/ In darkness?

〈昼夜を分かつ暗がりの中を歩む者達、季節と季節、時期と時期、時間と時間、ことばとことば、力と力の間を身をひき裂かれるような思いで歩む者達、暗闇の中でただ、ただずんでいる者達〉がそれである。これと同様の〈闇〉は〈Choruses from 'The Rock'〉(1934)にも見出される。

We must walk in black and go sadly, with long drawn faces,/ We must
go between empty walls, quavering lowly, whispering faintly,

〈われらは、悲しみと苦しみとの面持で、暗がりの中を歩かなければならない。われらはうめきながら、蒼浪として眼に見えぬこの壁の間を歩き渡らなければならない。〉人の一生は重荷を負うて、生活の坂を登ってゆくことの繰返しである。それが「実存」者としての人間の姿である。

ただ、ここで問題となるのは、〈twilight〉から〈darkness〉への変化が生じた理由である。〈薄明りの世界〉も〈暗黒の世界〉も共に人間の限界状況を表象しているものでありながら、〈Ash-Wednesday〉以後の作品にはほとんど〈薄明り〉ということばは見出せない。〔〈Burnt Norton〉において〈In a dim light〉ということばがある。〕この理由は次の引用からも明らかであるように、

Will the veiled sister pray for/ Those who walk in darkness

人間の救いの可能性が positive な像をとり始めた時期⁽¹¹⁾と無関係ではなさそうである。次の〈Ash-Wednesday〉と〈Choruses from 'The Rock'〉の引用からも明らかであるように、

And the light shone in darkness

In the Beginning GOD created the world. Waste and void./ Waste and void. And darkness was upon the face of the deep.

And we thank Thee that darkness reminds us of light.

〈闇〉ということばが、聖書的な光と闇というイメージをとり始めているのである。すでに述べた如く、人間の存在を人格がばらばらになって苦悩する薄明りの状態であると認識した時、その状況の中で、はかない夢を見つづけている苦痛と空虚さから逃れようとする意識が芽生えてくる。〔この意識を Berdyaev は〈たましいは（中略）光に向っても闇にむかっても同様に伸びかかわりをもって〉⁽¹²⁾おり、〈人間が一面において真理の光を認めながら、しかも他面において虚偽と誤謬の暗黒に身を投じている事実〉⁽¹³⁾であるという。〕このことは〈Those who are on the horn〉の〈the horn〉が〈救いのつ〉⁽¹⁴⁾を暗示することからも明らかであろう。つまり〈薄明りの世界〉に安住していることを許容しておかない意識が〈つ〉のように突きあげて、人間の魂をいやが上にも、悶えさせているのだと思われる。このような人間の実存的状況に基づいて考えるとき、〈闇に輝く光〉〈神の創造した闇〉〈光を知らしめる闇〉ということばが聖書的な〈人間の現実〉とそれに対する絶対者の〈救い〉を暗示していることは自ら明らかであろう。

Berdyaev も同様に〈暗黒〉のなかに人間が苦悩することを述べている。例えば次の引用などがそれである。

暗黒の世界に自己を疎外化し、悪しき孤立に悩む状態をさすのである。こういう状態におちいると、われわれは苦痛にみちた瞬間が際限なくつづく時間的世界に閉ざされ、その際限のない瞬間の連続に押され押されて底なしの深淵に送りこまれる⁽¹⁵⁾

さらにこの〈暗黒〉のなかに、〈闇に浸って光を怖れる人間の意識〉⁽¹⁶⁾即ち限界状況に定着しようとする人間の半面を認めている。だがそれにも拘わらず、〈暗黒〉から抜け出そうとする人間の半面があることを、Berdyaev は〈顕著な^{ベケールンク}転回、完全な闇から完全な光への移行〉⁽¹⁷⁾と呼んでこれを認めている。

さて以上述べてきたように、Eliot の形象する人間も Berdyaev の云う人間も、

共に〈薄明りの世界〉から〈暗黒の世界〉へと歩み続けるのであるが、次章においては、〈East Coker〉(1940)における〈darkness〉の意味を探究してみたい。それは〈神の闇〉への変質がその中心点であると思われるのであるが、いかなるところにその変転へのエネルギーが生じているのか、あるいはまた、究極的には Berdyaev の示唆している人間の救いの可能性についての考え方と Eliot の考え方との差を究明することになるのである。

IV

すでに〈一人間性の回復への試み一その I〉で述べたように、Eliot は〈Burnt Norton〉において、〈光の水で満たされる池〉のイメージを描き出すことによって人間存在に negative な半面ばかりでなく、positive な半面のあることを象徴している。池の〈emptiness〉が〈fullness〉へと逆転するときは、そしてそこに現実を忘却させる〈lotos〉がゆらめいて見えるときは、恍惚の一瞬であった。それは人間が自分の positive な半面を意識する恍惚のひと時であるが故に、覚めたときには、人間存在の negative な半面をいやという程、深酷に見せつけられるときであった。虚無と暗黒とが一層きびしく人間存在を包んで現前する。そしてこの〈虚無〉と〈暗黒〉のなかから聞えてくる、〈Go, go, go〉という小鳥の声に導びかれて、人間の再出発が敢行されるのだと考えられたのである。

エネルギーの補給がこの時点において、虚無と暗黒とに依って為されているのである。しかもそれは〈daylight〉でもなく、〈darkness〉でもない、〈a dim light〉薄明りの中で行われるのである。〈Filled with fancies and empty of meaning〉むなしい妄想に満たされ、何の意味もなしに、〈the strained time-ridden faces〉ひきつった疲れた顔をして、行き行き重ねて、行き行く人間の世界である。その時人間は下へ下へとまっ暗な意識のどん底に向かって沈潜する姿勢をとらなければならないと自覚するのである。それは自覚存在としての人間のもつ実存理性によるのである。それによって到達した世界の消息が次のものであると思われる。

Descend lower, descend only/ Into the world of perpetual solitude/
World not world, but that which is not world,/ Internal darkness,
deprivation/ And destitution of all property,/ Desiccation of the world

of sense, / Evacuation of the world of fancy, / Inoperancy of the world
of spirit;

〈下へ下へと沈潜して、ついに永劫の寂靜の世界に到りつくのである。ここは世界の
外の世界であり、人間の心のどん底である。暗くて何も無いところである。持つべき
何物もないところ、五感をもって感じとるべき何物もないところ、想像をもって見る
べき何物もないところ、魂の世界の尽きるところ〉である。同様の〈暗黒の世界〉は
〈East Coker〉においては人間の全てが落ち込んでゆくべき〈くらがり〉として形
象されている。

O dark dark dark. They all go into the dark, / The vacant interstellar
spaces, the vacant into the vacant,

And we all go with them, into the silent funeral, / Nobody's funeral,
for there is no one to bury.

〈そこは暗い暗いくらがりである。彼等はみんなそろって、そのくらがりの中を、も
っと暗い闇を目差してとぼとぼ歩いて行く。そこで我等もその葬列に加って、みんな
で歩いていく、黙って歩いていく。それはだれのための葬列でもない。埋葬されるべ
き何人もいない葬列であるから。〉これは虚無のまっ只中にはてしなく寂滅していく
人間存在の象徴であろう。そしてこれは人間の荒廢の果てに広がっている世界であ
る。

しかしこの〈暗闇〉には、〈暗黒が光〉へ、〈神の闇〉へと逆転する〈両義性〉⁽¹⁸⁾
が、弁証法的な止揚が、与えられている。

I said to my soul, be still, and let the dark come upon you / Which
shall be the darkness of God.

So the darkness shall be the light

〈自分は自分の魂に向かって言った、「じっとして居れ。そして暗黒がおまえを襲って
くるのを待て。その暗黒は神の闇となるであろう。〉〈「かくしてその暗黒は光明と
なるであろう」と。〉

けだし、この逆転（両面価値性の弁証法的な止場）へ向う エネルギーを得るために、人間にできることはじっと黙って〈待つ〉ということだけである。それは〈劇場内で暗転のさなかに、明りがつくのをじっと待つように〉待つことである。また〈地下鉄電車が暗闇のなかで急に止まってしまった時、交わす会話もと絶えてしまって、気持が空白になり、何を考えたらよいのかもわからない時、ただ電車が動き出すのを待つ〉ように待つことである。〈麻酔をかけられた時のように、意識はあるのに何も意識していないく、〔意識だけを意識する意識⁽¹⁹⁾〕即ち純粋意識が残されていて〉手術が終るのをひたすら待つように待つことである。〈wait〉という行為にはすべて不安が伴っている。その不安感は、暗い劇場が明るくなるという転回、電車が動くという静から動への転回、そして手術中の純粋意識から平常の意識を覚えるに到る転回も、すべて待っている人間の意志や自力に関係なく行われるところに原因があるのである。そこには人間の持つ可能性、即ち positive な面は認められていないのである。

I said to my soul, be still, and wait without hope/.... wait without love

Wait without thought,

〈自分は自分の魂に向って言った、「じっとして居れ。望まず、愛さず」〉〈「考えず、じっとして待てよ。無念無想にして待てよ」と。〉〈望まず〉〈愛さず〉〈考えず〉無為にして〈時〉の来るのを〈待つ〉空白な意識の中にその転回の動力がある。

このように暗闇の中で不安にかられつゝもじっと動かずに〈待つ〉という姿勢が、この〈暗黒の世界〉において形象されている人間像であると云えよう。〈神の闇〉への転回はこの〈待つ〉という一点にかけられている。

さて Berdyaev も同様にこの暗黒の世界を克服するためには純粋な実存の領域へ足をふみ入れ、高みをめざしてのぼるばかりでなく、下へと深みへと下降することを説き、しかも〈人間はどんなに努力してもこの非合理的な暗黒の深淵からのがれることができない〉⁽²⁰⁾という悲劇的な存在であると述べている。そしてこのような世界から救い出されるのは人間の力によるのではなく、神みずからがこの深淵に降り、人間の苦しみを人間のかわりに負うときに可能なのであると述べている。⁽²¹⁾しかしながら、⁽²²⁾例え

彼は人間の苦難の道をとおして、自由をとおして、人間の奥底にキリストを開

示する。⁽²³⁾

人間は被造物と創造者の結合である。(中略)人間は同時に、新しい事物の形相を実現させることを人間に可能ならしめる創造者の力⁽²⁴⁾をもっている。

ということばのなかには人間そのものに或る positive な面を見出しているということができるのではなからうか。勿論 Berdyaev は人神論の危険性をよく知っていた。それは<人間とこの世が神そのものであり、被造物と創造主が同じである、などというつもりは少しもないのだ>⁽²⁵⁾ <ドストエフスキーは人神性による誘惑を知っていた>⁽²⁶⁾などということばからも明らかなのである。しかし、

私は罪による意気沮喪から創造的飛翔への移行を成就したのである。(中略)私が創造という言葉を使うとき、それは決して文化的所産の創造を意味せず、あたらしい高次の生、あたらしい存在へと集中する、人間の全本質の震撼と飛翔を意味しているのである。(中略)それは世界^{フェルクレーレング}変容への、人間が用意すべきあたらしい天とあたらしい地への指向である。⁽²⁷⁾

創造性に関する私の思想のデモーニッシュな人間神化の性格……。⁽²⁸⁾

という人間の創造性についての微妙な発言のなかに、人神論的傾向を見出さずにはいられないのである。<人間をまったく神と対等の立場に上げたものであって、(中略)すこぶる人神思想の匂いの濃厚なものだ>⁽²⁹⁾と云われる所以であろう。

さて、このように Berdyaev の思想を探ってみると、Eliot と Berdyaev とが同質の人間像を認識しておりながら、最終的には決定的に同質ではあり得ない点が明らかになったと思われる。つまり Eliot の<暗黒の世界>において形象されたのは不安におのゝいて<待つ>ことしかできない徹底的に無力な人間の姿である。人間の持っている能力、可能性は全く否定され、受動的な存在でしかありえない。そこには神と人間との間にはっきりとした断絶があらわれているということができよう。しかし Berdyaev においてはくもし人間の本性がすでに神と同じであるならば、神化ということはおよそ必要ないであろう。しかしまた(中略)人間が罪であり無であるところに、神化がどうして起り得ようか。神と人間とあいだに超えられぬ溝があるとすれば、神化ということはおよそ考えられもしない>⁽³⁰⁾ということばが示すように、神と人間のあ

いだに断絶がないのである。この点において <East Coker> までの Eliot と Berdyaev とは区別されるべきであろう。従って<エリオットの麻痺と神秘主義における魂の浄化とは、たとえどのような外形的な相似性を共有するにしても、本来全く別個な本質に帰属するものである。>⁽³¹⁾と云い得る可能性を認めることができるのである。

* * * * *

さて以上の考察により、T. S. Eliot という詩人の道程の或る側面が<薄明りの世界>から<暗黒の世界>への展開であったということができよう。さらにこの<暗黒の世界>から<魂の夜明け>へと向って、祖型的な転回をなし、永遠の回帰をなしているかという点に関しては、稿を改めて考察してみたい。

-
- 註1 二宮尊道著：四つの四重奏， P.253 南雲堂，昭33
 註2 一人間性の回復への試み一そのI参照
 註3 西脇順三郎著：T.S.エリオット， P.138 研究社，昭31
 註4 深瀬基寛著：エリオット， P.280 筑摩書房，昭32
 註5 岩波小辞典：哲学
 註6 N. Berdyaev, 野口啓祐訳：ベルジャール著作集3 人間の運命， P.608, 白水社，1966
 註7 小池辰雄・野口啓祐共著：ベルジャール著作集6 神と人間の実存的弁証法， P.230, 1966
 註8 註6に同じ P.589
 註9 同上 P.589
 註10 同上 P.98
 註11 註2に同じ
 註12 註7に同じ P.185
 註13 同上 P.247
 註14 詩篇18章2節
 註15 註6に同じ P.606
 註16 註7に同じ P.81
 註17 志波一富・重原淳郎訳：ベルジャール著作集8 わが生涯， P.234, 1966
 註18 註1に同じ P.162
 註19 同上 P.163

-
- 註20 南原実訳：ベルジャーフ著作集5 精神と現実，P.296，1966
- 註21 註6に同じ P.242
- 註22 同上 P.609
- 註23 斎藤栄治訳：ベルジャーフ著作集2 ドストエフスキーの世界観 P.41，1967
- 註24 註7に同じ P.222
- 註25 註6に同じ P.202
- 註26 註7に同じ P.73
- 註27 註17に同じ P.288
- 註28 同上 P.291
- 註29 山本和綱：神と悪魔，P.42，創文社，昭32
- 註30 註6に同じ P.220
- 註31 寺田建比古著：T.S.エリオット，P.193，研究社，昭38